

ここでは、  
皮膚科サマースクールに参加された研修医の先生方から頂いた  
実際の質問を掲載しております。



# 皮膚科医はこれから 人手が余ると言われていますが、 実際はどうでしょうか？

「皮膚科医が余る」ということはありません。誤認識です。特に、医育機関、基幹病院において、多様性のある皮膚疾患を診療する専門医は不足しています。

実際に、皮膚科患者が多いために非専門医による診療によって支えられている事実もあります。

より多くの皮膚科専門医を育成していくことが、私たちの大きな責務です。

一緒に皮膚科領域を盛り上げていきましょう。



理事長 天谷 雅行先生  
慶応義塾大学 教授

# どんなときにやりがいを 感じますか？



患者さんとともに疾患の治療過程を実際に目に見えるかたちで共有し、ともに喜びを分かち合えたときに大きなやりがいを感じます。

これは皮膚科医の大きな特権の一つであり、ついには疾患を克服した時の達成感・充実感はとても大きなものだと思います。



杏林大学 教授  
大山 学 先生



院に進む人はどれくらいいますか？

また、どのタイミングで  
大学院に行くのが良いと思われますか？

院に進む人の割合は施設によって異なりますが、施設によっては半数以上が進みます。大学院で学ぶことは臨床能力向上に重要ですし、皮膚科学での新しい発見にもつながります。

ですので、臨床で優れた医師になるべく自己研鑽をつみたい、また、新規知見を発見し医学に貢献したい、と思った時が大学院に進むタイミングではないかと思います。



帝京大学 教授  
多田 弥生 先生



# 研修医のうちに やっておけば良いことって ありますか？

研修医1年目でローテートする内科・外科などのメジャー科もとても大事で、皮膚科医になった時にとっても役立ちます。救急ももちろん、病棟・外来での緊急時にはとても頼りになります。

勿論、皮膚科に直結する形成外科や膠原病内科の知識も学びたいです。もし海外の研修もカリキュラムに入っていたら、是非参加したいですね。

研修医の時期は、モラトリアムではなく医師として成長するために貪欲に最大限に有効活用すべきです。皆さんがやる気をもって研修すれば指導医も熱意をもって教えてくれます。あっという間の研修医生活であって欲しいです。



三重大学 教授  
山中 恵一 先生



# 留学はしやすいですか？

できますよ。  
留学には研究目的の留学や臨床力をつけるための留学があります。

後期研修プログラムの中で、興味をもった分野を深めたいと思ったときは、先輩に相談したり、日本皮膚科学会のCDLS、M&Mや日本研究皮膚科学会のきさらぎ塾に参加して、情報収集することをお勧めします。

同時に、留学して成果を得て帰国することは、それなりの努力苦勞が必要なことは言うまでもありません。きちんとした計画準備が必要です。



川崎医科大学 教授  
青山 裕美 先生  
(キャリア支援委員会委員長)



# 男性医師が仕事を しにくいことはありますか？

(女性医師が多い、肌を診なくてはならない等)

男性医師が仕事をしにくいということはありません。女性医師が多い診療科だからこそ、男性医師が活躍する場も多くなると思います。

例えば、女性医師の診察を希望する患者さんがいる一方で、男性医師の診察を希望する患者さんもいます。また、私が専門とする分野（皮膚腫瘍・皮膚外科）では、男性医師も女性医師も性別による差を感じることなく仕事をしています。



京都府立医科大学 浅井 純 先生

男性医師が働きにくいと感じたことは、自分自身はありません。受診される患者様が、女性医師を希望される場合もありますが、女性医師が不在で男性医師が診ることになった際も、問題になることはまずないように思います。診察の時に、女性看護師に介助にはいってもらえるなどの配慮は必要だとは思いますが。職場では、女性医師と男性医師が、それぞれの特性を生かして協力するイメージで、働きにくさは無いと思います。



杏林大学 佐藤 洋平 先生



# 女性医師は働きやすいですか？

他の科に対して皮膚科における最も大きなアドバンテージは、女性医師としてのロールモデルが多いという点であると思います。大学などで研究を続けている方や、子育てしながら一般病院で診療を行っている方など、ライフプランにおいて迷った際に相談できる先があるのは大きいのではないかと思います。



名古屋市立大学  
加藤 裕史 先生



済生会川口総合病院  
高山 かおる 先生

とても働きやすいと思います。

女性的視点は疾患を診るときに時として大変役に立ちます。  
また皮膚科は炎症から腫瘍、美容と網羅する疾患の範囲や、小児から高齢者までと対象年齢層も広いので、自分のライフスタイルや得意なことにあわせて働き方を選択しやすいとおもいます。